

## 講演要旨

## 1. 「雲南西北部の旅—第 8 回雲南 Field work、2010 年秋」—変化の激しさと多民族共生の重要性を実感—

元) 朝日新聞記者・前) 呉大学教授 中北 宏八

2010 年 11 月、第 8 回雲南 Field work に参加した。標高 1900m ほどの省都昆明を基点に、北西 710 km、標高 3300m ほどのシャングリラ（香格里拉）との間を往復した。雲南大学のバスで、麗江、大理などを回った。チベット族、イ族、ペー族、ナシ族などの少数民族が多く住み、雲南とチベットとを結ぶ交易で栄えた茶馬古道を辿る旅であった。初参加の私は、中国旅行僅か 3 回目にすぎないが、巨大中国の激しい変貌を実感し、盛衰の歴史を経て多民族が共生する姿に今後の世界のあり方を示唆するとさえ思った。

## 2. 「南詔国・大理国の歴史と雲南白族の歴史観」—阿嵯耶観音伝説を中心に—

東海大学文学部東洋史専攻 専任講師 立石 謙次

南詔国は 7 世紀後半から 10 世紀初頭にかけて、今の中国雲南地方を上回る広い地域を支配した。その後半には阿嵯耶観音を中心とした雲南特有の仏教を信仰した。この信仰は南詔国滅亡後、雲南地方を支配した大理国にも引き継がれていく。12 世紀中葉には、雲南地方はモンゴル・元朝によって滅ぼされ、中国に組み込まれた。その後、阿嵯耶観音信仰は現代白族の祖先たちの始祖伝説として受け継がれていった。

## 3. 「ブータン王国、国民総幸福(GNH)という開発理念と農村開発」 放送大学教養学部教授 河合明宣

開発の速度を抑え、自然、文化、宗教心を大切にし、ものの豊かさよりも心の豊かさを求める幸福の国として、ブータン王国が注目されている。四代国王は、森林や文化・伝統・宗教という地域「資源」保全を通じた漸進的開発こそが、総幸福社会につながるとする長期ビジョンを掲げ、国民を国づくりに巻き込んだ。この過程を概観し、自然再生可能資源(第 1 次産業と電力)と第 3 次産業(エコツーリズム)に支えられた経済政策をみる。

## 4. 「劔 沢 幻 視 考」—駆り立てられた山々「冬黒部、劔、海外の山々」— サンナビキ同人 和田 城志

山—その駆り立てるもの— 山岳雑誌『岳人』に連載した「劔沢幻視考」の中から、冬の劔岳、雪の黒部、そしてナンガ・パルバットの魅力を語りながら、私の目指してきた登山をお話します。未踏峰とバリエーション登攀の時代背景は大切です。山に登る魅力はどこにあるのかも、模索してみたいと思います。当然、登山におけるパイオニアワークにも言及すると思います。今どきのテーマではありませんが、私の辿ってきた道には不可欠です。元登山家の愚痴として聞いていただければ、幸いです。

## 5. 「極地から地球を見る」—しらせ探検から 100 年目の日本の南極観測—

国立極地研究所教授 (宇宙圏グループ)、AACK 山岸 久雄

アムンゼン、スコットが南極点に到達した 1911 年～1912 年、開南丸という小さな船で南極海に挑み、氷原を犬橇で走り、南緯 80 度に到達した日本人たちがいた。白瀬中尉を隊長とする南極探検隊である。今年は、この探検隊の出発から 100 年。白瀬の辞世の歌「我れ無くも必ず 捜せ南極の地中の宝世にいだすまで」に応えるかのように、日本の南極観測は今年で 54 年目を迎え、地球の環境を知る上で宝となる観測成果を世界に発信し続けている。最近の観測成果と、それを支える観測隊員、南極基地の生活を紹介する。